

あとがき

1

私は、この2年あまりの間、連続して、『コロナ騒ぎ謎解き物語』全3巻、『ウクライナ問題の正体』全3巻、『コロナとウクライナをむすぶ黒い太縄』全4巻を出してきました。さすがに疲れました。

そこで少し一休みして、もともと書きたいと思っていたブログ「野草・野菜・花だより」や「寺島メソッド健康教室」に移りたいと思っていた矢先に、イスラエルの「ガザ虐殺」が始まりました。

しかし、ここで少し休憩したいと思っていたので次の本を出す気があまり起きませんでした。ところがガザ情勢を見ていると、イスラエルの蛮行は一向に収まる気配を見せません。それどころか殺されるのは民間人、しかも女性と子どもが大半です。

しかも殺し方が尋常ではありません。民間人の避難先を指示しておきながら、避難先を求めて住民がそこに集まったときに、そこを爆撃するわけですから、眼を覆いたくなる惨劇が現出します。

日頃はアメリカの意向を忖度そんたくばかりしているICJ（国際司法裁判所）でさえ、これは GENOCIDE（ジェノサイド＝集団殺戮さつりく）だという判決を出して、即刻その殺戮行為を停止するよう命じました。

にもかかわらずイスラエルは一向に殺戮行為を止めるところか、今はレバノンにまで殺戮行為を拡大しています。

たぶんガザにおける虐殺ぶりがいまにも非道いので世界中から非難の声が沸き起こり、その世論転換、「めくらまし」のための戦術転換だったのでしょうか。

しかし、ボケベルやトランシーバという民間人が日常的に使う道具を爆破させるといふ攻撃からレバノンへの攻撃を始めたのですから、これは明らかに「戦争犯罪」でした。

ところが不思議なことに、このような「戦争犯罪」を欧米諸国は非難するどころか武器や資金を援助し続けています。日頃は「ルールに基づく政治」を声高に叫んでいるアメリカも、このような国際法違反を制止する気配を見せません。

欧米諸国の指導者が日頃から信じているキリスト教というのは、こんな蛮行を許す宗教なのでしょうか。またイスラエルのネタニヤフ首相は、「パレスチナはユダヤ人が神から与えられた土地だ」と恥ずかしげもなく公言しています。

ユダヤ教は、こんな蛮行を許す宗教なのでしょうか。だとすれば彼らの「神」とはなんという恐ろしい神なのでしょうか。

こんなことを考えているうちに、しばらく休息するつもりだった私の気持ちに新しい怒りが湧いてきました。というのはこんな事態にたいして日本政府はもろろのこと大手メディアもイスラエルに對してきちんとした声をあげようとしていないからです。ロシアがウクライナに進攻したときと何という違いでしょう。

ウクライナ軍の拠点マリウポリをロシア軍が攻略したとき、ウクライナ軍「アゾフ大隊」は市民を人質にして製鉄所の巨大な地下壕に立て籠もりました。が、ロシア軍は市民の安全どころかネオナチの「アゾフ大隊」の命すら奪わず、投降させることを優先しました。そのためマリウポリを陥落させるのに3か月を要しました。

これを見て、元アメリカ財務次官ポール・クレイグ・ロバーツは「ブーチンのお人好し、3日で済む攻略に3か月もかけている」と揶揄したくらいでした（『ウクライナ問題の正体』第2巻第2章）。確かにイスラエル軍のように、女性や子どもと一緒に爆破してしまえば、戦闘は一瞬にして終わります。

それどころかイスラエル軍は、「敵陣に捕虜になっている自分たちの兵士ですら一緒に爆撃しろ」という有名な「ハンニバル指令（Hannibal Directive）」をもっていますから、戦争はもっと簡単に決着します。ところが大手メディアでは、ロシア軍の戦いを非難することはあっても、上記のようなイスラエル軍の戦いを非難する論調は、ほとんど読んだことはありません。

先日、「武器取引反対ネットワーク」代表・杉原浩司氏ですら、「モンゴル政府は戦争犯罪人ブーチンを逮捕しろ！ 9・2大使館緊急アクションへ」というメールを送ってきて、私を驚かせました。

杉原氏のような左翼・リベラルの先頭を走っているはずの人物ですら、「プーチン＝独裁者」という大手メディアの「ロシアの悪魔化」の論調に乗せられているのです。緊急行動を呼びかけるのであればモンゴル大使館ではなくイスラエル大使館でしょう。

私が重い腰をあげて、「仕方がない、あと1冊だけ本を出すか」という気になった所以^{ゆえん}です。自称「神に選ばれた民（ユダヤ人国）」と自称「神に選ばれた国（アメリカ）」に鉄槌をくだす必要を強く感じたからです。

4

さてネタニヤフ首相は先述のとおり「神はユダヤ人にバレスチナの地を与えると聖書で宣言しているから、我々にはイスラエルという国を建国し、それを守る権利がある」と主張しています。

本書では聖書のどこにそんな文句が書かれているのかを示しておきましたが、しかしよく考えてみると、聖書はユダヤ人という民族が自己正当化のために編集した「一種の神話」ですから、そんな神話をもとにして権利を主張するというのも実に奇妙な話です。

そういう言い方が許されるのであれば、「古事記や日本書紀によれば神が日本をつくったとされている。その神の直系が万世一系の天皇だ。『満州国』という国も、その神が認めて建国したものであるから、我々にはそれを守る権利がある」という主張も許されることになります。

しかし、そんな主張が通じなかったからこそ日本は孤立し、結局は「国際連盟脱退→アジア太平洋戦争（第2次世界大戦）→敗戦」という道筋をたどることになりました。そして「現人神^{あらひとがみ}」とされていた天

皇も、戦後は「人間」になりました。

同じことはイスラエルについても言えるはずですが、欧米諸国はキリスト教国であり、旧約聖書という聖書を自分たちも共有しているからでしょうか、NATOもイスラエルの言い分に異を唱えているという話は聞いたことがありません。

もっとも、アメリカという国は世界で最も科学が発達した国であるはずですが、「過去10年間に行われた調査においても、44〜47%の人が、神が過去1万年ほどの間に人間を現在のような形で創造したと信じていると答えている」(ウィキペディア) そうですから、アメリカがネタニヤフ首相の主張に異を唱えないのも無理はないとも言えます。

それにしても大統領までも、そのようなレベルだとすれば、アメリカの未来は暗いと言わざるを得ません。

5

ネタニヤフ首相が、「パレスチナという土地は神がユダヤ人に与えた土地だ」「だから我々はそれを所有し守る権利がある」という主張は、先述のように、旧約聖書という「神話」をもとにしたものですから、荒唐無稽と言わざるを得ません。

しかも、白人であるネタニヤフ首相が「パレスチナという土地は神がユダヤ人に与えた土地だ」と主張するのですから、その荒唐無稽さは倍加します。

というのは、ユダヤ教の誕生は、聖地とされるエルサレムを見れば分かるように、中東すなわち西アジア

アでしたから、ユダヤ人はアラブの人たちと同じ褐色人だったはずですが。つまりユダヤ教を批判してキリスト教の祖となったイエスもユダヤ人であり褐色人だったはずですが。

ところが不思議なことに現代の絵画では、イエスもその母マリアも白人として描かれています。

それはともかく、イスラエルのネタニヤフ首相の出自を調べると、生まれはイスラエルですが、やはり東欧系ユダヤ人で、明らかに白人です。

ですから、一步譲って、旧約聖書の「神がユダヤ人にバレスチナの地を与えた」ということを認めたとしても、そのユダヤ人は褐色人であって白人ではありませんでした。

旧約聖書で述べられている直系ユダヤ人（褐色人）がそのような主張をするのならまだしも、傍系ユダヤ人（白人）がそのような主張をするのであれば、それは一種の詐欺行為と言うべきでしょう。

しかし、それにしても、なぜこんな不思議なことが起きるのでしょうか。

6

私は本文でも述べたとおり、以前から、なぜアメリカにはユダヤ人が多いのか、しかもなぜ白人なのかを不思議に思っていました。

私が翻訳した『チョムスキーの教育論』や『肉声でつづる民衆のアメリカ史』（いずれも明石書店）の著者ノーム・チョムスキーやハワード・ジンも東欧系ユダヤ人でしたが、彼らも白人でしたから。

そこでいろいろ調べているうちに、ユダヤ人には大きく分けて「アシケナージ系」と「スファルディ系」の2種類があることが分かりました。

そして、いまイスラエル国の上層階級となり経済を支配している勢力は、「聖地シオンの丘に建国を！」と呼びかける「シオニズム」運動を通じてイスラエルを建国したひとたちであり、「アシケナージ系（東欧系）」すなわち白人だということが分かったのです。

他方、「スファルディ系（南スペイン・北アフリカ・西アジア系）」はイスラエルが建国されたあとにイスラエルに移住した人たちでした。彼らは褐色人ですから直系ユダヤ人と考えられるのですが、イスラエルでは下層階級として貧困な生活を強いられています。実に皮肉な話ではないでしょうか。

しかし、ここでもう一つ疑問が湧いてきます。傍系ユダヤ人である「アシケナージ」が、なぜ東欧に多かったのかという疑問です。

そして調べて分かったことは、「アシケナージ」のルーツは、七世紀から一〇世紀に黒海北部からコーカサス地域にかけて栄えたトルコ系遊牧民族の国家、すなわちハザール王国だったのです。

7

このハザール王国については本文で説明したので詳細は割愛しますが、もしこれが事実だとすれば、ネタニヤフ首相の言い分はますます荒唐無稽ということになります。

なぜならハザール王国の国民は明らかに旧約聖書で述べられている直系ユダヤ人（褐色人）とは異なります。聖書で「ユダヤ人にパレスチナの地を与える」と書かれていても、それは直系ユダヤ人に対してであり傍系ユダヤ人（白人）ではなかったからです。ですから、先述したように、傍系ユダヤ人（白人）がそのような主張をするとすれば、それは一種の詐欺行為と言わなければならないでしょう。

私がこのことを知ったのはネットで調べていて発見したことです。

が、このハザール王国について詳しく調べたアーサー・ケストラーの著書『ユダヤ人とは誰か 第十三支族・カザール王国の謎』（三交社、一九九〇）が、先日やつと手元に届きました。読んでみると、実に詳細にハザール王国について調べていて驚嘆させられました（訳者の宇野正美氏は、「ハザール王国」ではなく「カザール王国」としている）。

このケストラー説を根拠にしてネタニヤフ批判をするひとたちを、ネタニヤフ首相は「反ユダヤ主義者」と非難していますが、ケストラー自身がハンガリー出身のユダヤ人ですから、そのような非難はユダヤ人であるケストラーに失礼極まりない行為でしょう。

なおケストラーの原著の題名は『第十三支族（The Thirteenth Tribe）』となっていますが、これは「ユダヤ民族のルーツを辿れば十二支族に収まるとされているが、十三支族目がいた。それがカザール王国だ」とケストラーは言いたかったのでしょうか。

ただしハザール王国の国王がユダヤ教に改宗したとしても、それが国民に一挙に広まったと考えられません。それは仏教が六世紀半ばの日本に伝わったとき、天皇が良しとしても天皇の側近の間でも賛否が分かれ、それが物部氏と蘇我氏との争いの原因になったことでも明らかです。

しかし時間が経つにつれて日本が仏教国になったのと同じように、ハザール王国にユダヤ教が徐々に広まっていったことは間違いないでしょう。

あとひとつだけ、ここでも述べておきたいことがあります。

それはイスラエル建国運動、シオニズム運動に邁進まいしんしたアシュケナージ系ユダヤ人（白人）が犯した犯罪についてです。

それは彼らシオニズム運動の指導者たちが、ヒトラーのナチスと「ハーバラ協定」という密約を交わして多くのユダヤ人をガス室に送り込むことに手を貸したという事実です。彼らはナチスがユダヤ人を迫害すればするほど、それを逃れようとするユダヤ人がイスラエルに脱出するだろうと考えたのです。

しかしイスラエルにはお金持ちしか行くことが出来ませんでしたし、シオニズム運動の指導者たちもパレスチナに来てほしいと思っていたのは、建国のために資金を出してくれる富裕層だけでしたから、他の多くのユダヤ人は結局「強制収容所」に送られ、「ガス室」に消えて行きました。

ネタニヤフ首相が進めてきたシオニズム運動はこのような暗い過去をもっているにもかかわらず、それを何ら反省することなく、ユダヤ人が味わった酷いひどい「ジェノサイド」「民族浄化作戦」を、今度はパレスチナ人におこなっているのです。

第12章でハーバラ協定を説明したときは、手元に資料がなかったのでネットで調べるしか方法がなかったのですが、待ちに待っていた『ファシズム時代のシオニズム』（L・ブレンナー、法政大学出版局二〇〇一）が先日やっと届きました。

それを読んで、私が本文で書いたことに誤りがなかったことを知り、ホッとしました。と同時に、この

ブレンナーの著書には「ハーバラ協定」について、もつと詳しい説明が載っていたのに、それを十分に本書に組み込むことが出来なかったことを申し訳なく思っています。

9

しかし、ここで追記しておきたいことは、この書を元にネタニヤフ首相のやっていることを批判すると、またもや「それは反ユダヤ主義者の主張だ」という非難が返ってくる恐れがあるということです。

そのような非難に対して、本書の著者レニ・ブレンナー (Lenni Brenner) がニューヨーク生まれのユダヤ系社会運動家であり、一九六〇年代の公民権運動など一貫して人権運動や反戦活動を実践してきた人物であることを突きつけてやりたいと思います。そうすればネタニヤフ首相もぐうの音も出ないのではないのでしょうか。なにしろ著者はアメリカの白人右翼ではなく、真正正銘のユダヤ人なのですから。

それにしても、ノーマン・フィンケルスタインが、自分の著書で、この「ハーバラ協定」にふれていないことが少し残念です。というのは、フィンケルスタインは、アメリカのユダヤ人エリートが「ホロコースト」を口実に金稼ぎに励んでいる現実を鋭く告発した書『ホロコースト産業——同胞の苦しみを「売り物」にするユダヤ人エリートたち』（三交社、二〇〇四）を著して有名になった人物だからです。

彼もまた、ナチスの「ホロコースト（絶滅政策・大量虐殺）」を生き延びたユダヤ人を両親にもつ真正正銘のユダヤ人であり、『イスラエル擁護論批判——反ユダヤ主義の悪用と歴史の冒瀆』ほうとく（三交社、二〇〇七）という著書も公刊しているだけに、私にしてみれば、彼にもどこかで「ハーバラ協定」に言及して欲しかったと思います。

すでに述べたように、イスラエルによるガザ殲滅作戦せんめつが続いているのを見て、ユダヤ教という宗教は何という残酷な宗教かという思いが強くなりました。

何しろ、そこに先住民がどれだけいるが、「お前にその地を与える」「だから先住民を殲滅しろ」と命じる神を、自分の頭上にいただくのがユダヤ教なのですから。

それでも、イスラエル建国に反対する（むしろ「イスラエル国を解体せよ」と主張する）いわゆる「超正統派」と言われる人たちの存在に、少し救われる気持ちがあります。

彼らは、先住民を殺し尽くしてイスラエルを建国し、それを守ろうとしている「シオニスト」と言われる人たちを、「それはユダヤ教の聖書『トーラー』の教えに反する」と主張しているからです。

他方、このイスラエルの蛮行を批判するどころか、むしろ支援しているのがキリスト教国（すなわち米
国およびEU諸国）の支配者たちです。

そういう意味では、イスラエルによるガザ殲滅作戦は、私にキリスト教という宗教にも強い疑問を感じさせるようになりました。「こんな蛮行を認めたり許したりするキリスト教の神とは何か」という強い疑問が湧いてきたからです。

そんなときに出会ったのが哲学者ニーチェの『キリスト教は邪教です』（講談社新書、二〇〇五）でした。これには「キリスト教はイエスの教えにあらず」「戦争を生み出す新約聖書」などという章もあり、やつと疑問が氷解しました。

考えてみれば、コロンブスが南米ハイチ島の先住民を殺し尽くしたときも先頭に立っていたのはキリスト教宣教師でした。彼らは「金の在処（きんありか）を教えろ」と先住民を拷問し、キリストの名において火あぶりにかけて殺し尽くしたのです（詳しくは『肉声でつづる民衆のアメリカ史』上巻第1章）。

ニーチェと言えば、難解な哲学者という印象しかなかったのですが、この書でニーチェの印象が全く変わりました。上記第2章「キリスト教が世界をダメにする」では仏教を礼賛していることも、私を驚かせました。

と同時に、欧米キリスト教諸国の指導者がイスラエル支持に走っている理由の半分は理解できたように思いました。本書「あとがき」として、以上のことをどうしても書きたいと思った所以（ゆえん）です。

いずれにしても、私のこのささやかな本が、いまパレスチナやレバノンで展開されているネタニヤフ政権の残虐行為にたいして少しでも歯止めになることを願ってやみません。なぜなら現在の日本政府はアメリカの召使いとしてイスラエルに援助することはあっても、それを批判することはほとんど皆無だからです。

二〇二四年一月二〇日

寺島隆吉

著者紹介

寺島隆吉（てらしま・たかよし）

1944 年生まれ。思想家。東京大学教養学部教養学科（科学史・科学哲学）卒業。元、岐阜大学教育学部教授。現在、国際教育総合文化研究所所長。

岐阜大学在職中に、コロンビア大学、カリフォルニア大学バークリー校、サザンカリフォルニア大学客員研究員、ノースカロライナ州立 A & T 大学（グリーンズボロ）およびカリフォルニア州立大学ハイワード校の日本語講師などを歴任。

訳書：『チョムスキー、アメリカンドリーム^のの終わりー 富と権力を集中させる 10 の原理』（Discover21）、『チョムスキーの教育論』『チョムスキー 21 世紀の帝国アメリカを語る』『肉声でつづる民衆のアメリカ史』上下巻（以上、明石書店）、共訳書：『衝突を超えてー 9・11 後の世界秩序』（日本経済評論社）、ロートブラッド他（編）『核兵器のない世界』（かもがわ出版）など多数。

著書：『コロナとウクライナをむすぶ黒い太縄 1ー まだどれだけ殺すつもりか イベルメクチン^の圧殺とファシズム化するアメリカ』『同 2ー 「プーチンの大罪」？そして未来は EU の崩壊かゼレンスキーの降伏か』『同 3ー 闘うイベルメクチンの飲み方・使い方。コロナもワクチンも^{ベンタゴジ}国防総省が開発した生物兵器』『同 4ー 殺ったのは誰？なぜ？安部暗殺からブリゴジンまで』『ウクライナ問題の正体 1ー アメリカの情報戦に打ち克つために』『同 2ー ゼレンスキーの闇を撃つ』『同 3ー 8 年後にやっと叶えられたドンバス住民の願い』『コロナ騒ぎ謎解き物語 1ー コロナウイルスよりもコロナ政策で殺される』『同 2ー 「メディア批判」赤旗から朝日まで』『同 3ー ワクチンで死ぬかイベルメクチンで生きるか』（以上、あすなろ社）、『英語教育原論』『英語教育が亡びるとき』『英語で大学が亡びるとき』（以上、明石書店）など多数。

論文：「ケプラーにおける調和論の諸問題」（日本科学史学会『物理学史研究』第 4 巻第 3・4 合併号 17-32 頁、1969 年）など多数。

イスラエルに^{てっつい}鉄槌を ユダヤ人がユダヤ人を殺した「ハーバラ協定」

2024 年 11 月 29 日第 1 刷発行

著者：寺島隆吉（てらしまたかよし）

発行者：紫田陽子（しだようこ）

発行所：有限会社 あすなろ社

住所：502-0071 岐阜市長良 2794-1

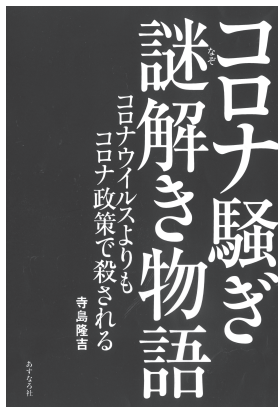
TEL&FAX：058-297-1509

印刷所：株式会社大洋社

2024 Terasima Takayosi Printed in Japan

ISBN978-4-900956-40-7 C0036 ￥2000E

『コロナ騒ぎ謎解き物語』 全3巻



コロナ騒ぎ 謎解き物語 —— コロナウイルスよりもコロナ政策で殺される
¥1,430(税込み)

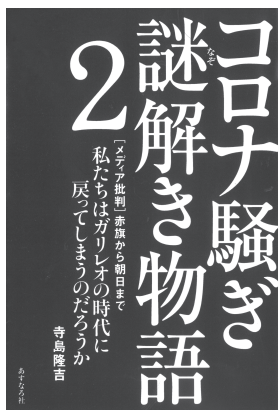
「コロナウイルスよりもコロナ政策で殺される」

「ワクチンで死ぬかイベルメクチンで生きるか」

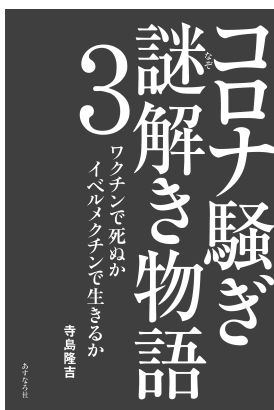
本書では、コロナ騒ぎの最初から上のように警告してきましたが、いまや事態は本シリーズが予言したとおりになっています。

また「私たちはガリレオの時代に戻ってしまうのだろうか」と、赤旗から朝日まで徹底的にメディアを批判しました。

かつて「北斗七星の存在」だった共産党が凋落したことは2024年の総選挙で明らかになりましたが当然の結果とも言えます。が残念なことでした。

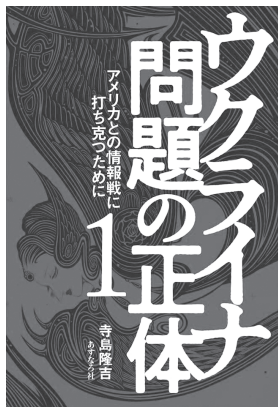


コロナ騒ぎ 謎解き物語2 —— [メディア批判] 赤旗から朝日まで 私たちはガリレオの時代に戻ってしまうのだろうか
¥1,100(税込み)



コロナ騒ぎ 謎解き物語3 —— ワクチンで死ぬかイベルメクチンで生きるか
¥1,100(税込み)

『ウクライナ問題の正体』全3巻



ウクライナ問題の正体1 —— アメリカとの情報戦に打ち克つために
¥1,100(税込み)

ウクライナ紛争はプーチンの大罪です。

というのは、元アメリカ財務次官ポール・クレイグ・ロバーツは「プーチン大統領はお人好し。3日で済む戦争に3年もかけ、いまや核戦争の瀬戸際にある」と言っているからです。

そして「民間人の犠牲者を極力少なくする」というプーチン大統領の善意が、「玉砕」を強いられているウクライナ軍だけでなくロシアの兵士・民間人にも多大な犠牲者を出すことになっています。

私が「ウクライナ紛争はプーチンの大罪だ」というゆえんです。

本書は、2014年の「ウクライナ・クーデター」から始まっていたこの戦争の正体を余すところなく解明しました。当然、「ゼレンスキーの闇」についても鋭いメスを入れました。



ウクライナ問題の正体2 —— ゼレンスキーの闇を撃つ
¥1,100(税込み)



ウクライナ問題の正体3 —— ゼレンスキーの後釜は誰か？「狂人理論」「狂犬戦術」に取り憑かれたゼレンスキー
¥1,100(税込み)

『コロナとウクライナをむすぶ黒い太縄』 全4巻

ウクライナ紛争が、CIA と国防総省が仕掛けた「プーチン政権の転覆工作」だったことは、いまでは誰の眼にも明らかになりつつあります。

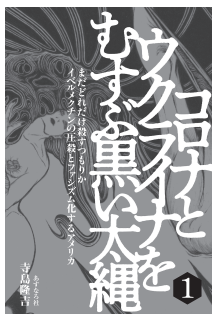
しかし「コロナ騒ぎ・ワクチン接種」までもが、国防総省による「人類への戦争だった」ということは予想だにしていませんでした。

これを明らかにしたのはサーシャ・ラティボワという女性でしたが、それを日本で初めて紹介したのは私のブログと、それを元にした本シリーズだったのではないかとと思っています。

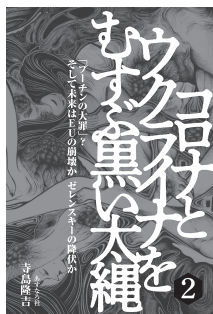
つまり「コロナ騒ぎとウクライナ紛争の“根っこ”がひとつだった」のです。

そして mRNA ワクチンという生物兵器で人口削減するための障害物となったのがイベルメクチンでした。ですから米国政府は総力を挙げてイベルメクチン弾圧にのりだしました。

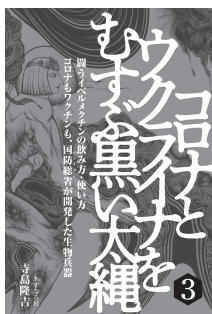
以上のような経過を詳しく報告したのが本シリーズです。そのなかで「イベルメクチンの飲み方使い方」についても詳しくふれました。



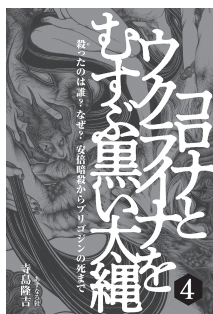
¥1,650 (税込み)



¥1,650 (税込み)



¥1,650 (税込み)



¥1,870 (税込み)